

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 163

霊能者はよく人間の過去を今あるかのごとく再現してみせます。人間の表面意識が頭に忘れ去ってしまっているものを思い起こさせます。またまだこの将来の出来事を予言します。このようなことを可能にする根拠は人間の精神のどんなことに基づいているのでしょうか。過去とか未来とか言われるものは現在とどのようにつながっているのでしょうか。

例を仏教の禅にとって考えてみることにしましょう。禅の言葉に「過去心不可得、現在心不可得、未来心不可得」というものがあります。過ぎ去ってしまった現象はもう存在していないのだから今そのあるがままに再現することはできない。現在とは何かと考えても、現在は一瞬一瞬移って行って、これが現在だと捕捉することはできない。未来もまたまだ来ていないのだからこれですと、示すことはできない。

以上のように過去も現在も未来も、今まで考えていたようには真実味はなく確固とした存在ではないと意識に言い聞かせてしまうと、心は真実、何に頼ることもできない二ヒリズムに陥ってしまうでしょう。しかし以上の精神作用が種々の心的現象が起こってくる本源の世界、すなわち空の自覚を求めるとして行われるならば、次々に生起しては消えていく日々の現象に心を追い回されていた自我意識がスーッと消えて、現象の根元の宇宙である「空」を確認することに導くのです。この時意識の大きな転換が起こります。

「1、合気神道では（空）は確認する事は、自分が今何も考えていなかったことを

確認するのと同じ意味のことで捉えています。その時氣の流れを身体に起こし、自分の中心に渦として捉えます。氣の流れは考えることなく、思うことで起こします。思うは今此所で、（今という瞬間に、此所で思う）です。」

今までは日々日常に次々と起こる心の現象の中に身を置いて、自分や他人との関連において自我を意識していた自分が、その関連の上での自我意識が消えてしまい。広い広いたひとつしかないひとつしか存在しない宇宙がそのまま自分の生命の本体であることに気づくのです。

広々とした無限の宇宙が自我の本体なので自分の視点はそのまま宇宙の中心であることが確認されます。自分則宇宙であることの確認です。「天上天下唯我独尊」です。

小さい自我ではないこの大きな我すなわち宇宙の眼で個々の現象を見る時、禅宗のいわゆる「一念あまねく観ず無量劫、無量劫の事すなわち今のごとし」の言葉が真実であることが了解されます。今一瞬の人間の思いの中に過ぎ去った無限に長い出来事を見ることができます。過去の莫大な量の出来事が総合されて今の一瞬を形成していることを知ります。

「2、稽古で意識を広げ続けると、自我意識は消えて行くのを確認できます。その時自分の中心にウが生まれます。それが宇宙の中心と捉えています。しかし過去の一切の出来事を観ること出来ません。禅宗の僧が知覚するような世界は今のところ現れません。」

この過去の一切の出来事が一丸に込められて活動している永遠の「今」を見ることができます。この今、
ここを日本の古神道は「中今」と呼びます。過去と未来と呼ぶのもつまり永遠の今を構成する内容
に他なりません。平たく言えば一瞬の今の想いの中に人類の過去の全ての出来事は記憶として込められ
ているということです。

ですから永遠の今である中今の内容、を起こってきた年代順の関連で並べていけば「過去の歴史」が形成されることとなり、その中今の内容を計画の希望に従って並べれば「未来」が展望されることとなります。また宇宙の眼で見る時精神の世界には時間とか空間とかの障壁が全然存在しないことが確認できます。一切は永遠の今の内容に過ぎないのでから。哲学的に表現しますと時間・空間とは人間の精神思考の形式または範疇であると表現されます。精神的宇宙は透明で見通すのに時間的空間的障害はないのです。

「3, 中今らしきところにはいるとは思いますが、中今の内容が知覚できる状態ではないです。もっと一瞬を求める必要があります。」

..164 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 164

もちろん霊能者の大部分は「空」の自覚はありません。けれど書く霊能者はそれぞれ何らかの方法で自我意識を薄れさせ自我を無にして、透明な永遠の今の世界に触れようとする努力がなされています。永遠の今の世界に触れようとする努力がなされています永遠の今に一瞬でも接触することによって霊能は発揮されます。霊能者が過去や未来の真実を言い当てるのはこの永遠の今に触れるからなのです。このことが霊能を可能にする第一の条件です。霊能を信用できるか否かの判定は第一に霊能者がこの大きな宇宙すなわち空の宇宙に真実触れているかどうかを見ることです。触れていなければ霊能ではなく単なるごま

かしです。

空を自証した禅坊主はまた「汝と我と同根、また奇特なり」といいます。君も僕も同じ宇宙を根として生えてきた枝同士だ。お互い様なんとありがたいことではないか、といった意味でしょう。肉体的には全く別々の存在である汝と我が、実は同じ先天的な宇宙から発現してきた兄弟なのだということです。それゆえ先天世界に触れることができるならば自と他の別は取り払われて自分を見るが如く、他人の過去・未来を看破することができます。

「4、この（空）を自認できる段階ではありませんが、内容の理解はできます。」

個として肉体を持ち生まれてから集積してきた知識と経験の総合が、人間の自我だと飲み思い込んでいる人は、上述の霊能の説明に示された現象はある特殊な人の得意な能力であるとは思えないかも知れません。しかしそうだと決めてかかれなことは少し考えてみれば明らかです。

心の宇宙である「空」の自覚はなくとも空と同様の広さを感じさせるのは子に対する母親の愛ということが出来ます。それゆえ子供に何かが起こると母親は誰よりも早く胸騒ぎを感じ、変事のあったことを知ることが出来るのではないのでしょうか。得意不得意の差こそあれ、人間は誰しも自我意識の執着を捨て広い宇宙を垣間見ることによる種々の洞察の修行をするならば、霊能は必ず開けてくるものなのです。それは大工さんが経験の積み重ねによって腕を上げ、ピアニストが毎日の練習によって上手になっていくのと何ら変わることはありません。

「5、自我意識の執着をすてる稽古、即ち合気神道の稽古と同じ意味と思います。」

そして種々の洞察の修行、(物事を観察してその奥底にある本質を見抜く修行) をする事で、霊能は開けてくると言うことか つまり先入観を持たずに物事の本質を観る稽古、つまり言霊として捉え、その本質とはウ・オ・ア・エの世界にその人の思いはあるかを観ることを積み重ねる修行ことか」

・・165 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 165

これまで私は種々の霊能活動が可能である根拠を仏教の禅の「空」の立場から説明してきました。今からもう一步踏み込んで言霊原理の立場から霊能の詳しい法則について検討していくことにします。禅の「空」即ち精神的宇宙とは一切現象がその宇宙から発現してくる根元の宇宙であり、それ自体は何もないただ現象発現のエネルギーが満ち満ちている宇宙です。いわゆる先天宇宙です。この宇宙から現象が発源しようとするとき、この先天宇宙の内部でどんなことが起こるのか、起こってくる現象の根本要素はどんなものかを余すところなく解明したのが言霊原理です。精神宇宙の先天と後天すなわち宇宙内に現象が起こる以前と起こってきた世界一切の構造と活動を明示した学問です。ですからこの言霊原理から見れば人間が発想し行動する精神現象はすべて明らかに説明することができます。

霊能現象も例外ではないわけです。検討に入りましょう。

「6、このエネルギーに満ちた(空)世界とは、ア・イ・ウ・エ・オの母音のエネルギーに満ちた世界、そこから生まれ出ることので父韻チキミヒリニイシが働き始め、現象化する創造活動が始まることを云っている。」

人間社会には地位か品位とかいうものがあります。霊能の世界には霊位といったものが存在します。

下位の霊能者は自分の住む霊位の世界の中では霊能を働かすことができても、それより高次の霊能の世界については決して見透したり見定めたりする霊能を働かすことができません。いなそれよりの高次の霊能の世界の存在すら覚知することができません。このことが霊能者の能力を判定する第2の観点です。

「7, 霊能には霊位があると云うことか、上位の霊位に対しては見えず同霊位が下位の霊位は見透す事が出来る。下位の霊位とは 自分の心が言霊ウ・オ・ア・エ・イのどの世界に住んでいるかと云うことで霊位が決まると云っている。」

霊能には5段階あります。それは人間精神に5次元の世界があるからです。人間が生まれて成長して自覚が進んで行く順序に従って説明しますと、最初は五官欲望の次元です。何々が欲しい、何々になりたい、より豊かに安楽になりたい、という欲望の世界です。食べたり、稼いだり、何々になりたいと欲する心は人間が生きていくための最初で最低の必要欠くべからざる能力です。この次元が人間の唯一の世界だと思って疑いを持たずに一生を終わる人も少なくありません。霊能をこの次元でのみ発揮する霊能者がいかに多いことでしょう。金運・結婚運・出世運だけが霊能や易判断の世界だと思っている霊能者・易者が大部分ではないでしょうか。

「8, (欲望・経済・産業の世界) 言霊ウの心の世界です。ウと云っても(経験知)オがないわけではありません。また(感情)アがないわけでもありません。(選択知)エがないわけでもありません。ただ欲望を達成するために他の経験知オ、感情ア、選択知・実践智エ、を目的達成のために道具として使う心の世界です。」

..166 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 166

次の人間の自覚の段階は知識能力の次元です。五官感覚の世界で経験した現象と現象相互の関連の法則を見つけて行く段階です。一般に学問・知識の世界のことです。一般の霊能・易占いの能力はこの次元に直接関係することは少ないようです。なぜならこの次元では自ら合理性を求めることが目的であり、それに反してオカルト世界はその非合理のゆえに人々の関心を引くのですから。ただオカルト的に断言された結論を後で補足説明するためにこの世界の既存の論説が使われることは大いにあります。易占いで出た八卦の判断の説明に易経という本に書かれた八卦の法則の解釈を補助手段として利用することがよくあります。

「9, (学問・知識・経験知) 言霊オの心の世界です。この世界も我欲の世界です。同じように総ての言霊は、言霊オ(学問・科学)を追求するため、他の言霊は道具として使います。」

人間の持つ性能の第3の段階は感情の世界です。一般にこの世界から発現してくるものは宗教・芸術の活動です。先にお話した禅の「空」とはこの世界の自覚のことです。人間精神のあらゆる現象が起こってくる根源の世界です。宗教の信仰上この宇宙の存在を自覚する時、救われたとか空観とか呼ばれます。寂光の浄土などと表現されます。この宇宙を芸術の上で求めた時、無限で無礙な光であり、最高調和のリズムとして受け取られます。芸術における名人・巨匠とはこの世界の光やリズムを追求し、突き止めた人達です。そして本文の主題である霊能者や易占いの人たちも生まれつきでか、また何らかの方法で方法や

道筋でこの世界と直接に接触することができる人たちなのです。この世界が一切のオカルト現象の基礎で
あります。この宇宙は人間精神現象の発現してくる大元の世界ですので、この世界に何らかの視点を持つ
人がそこから発する現象を見透すことが可能となるわけです。

「10, (芸術・宗教・感情) 言霊アの世界 (空) 自覚の世界 先ほど記したように
空を感得するために意識を広げ続けることを行います。何も考えない状態を創れます。
合気道で使うキはこの状態になれば使うことが出来ます。しかし、無礙光や寂光の光り
が見えることはないです。精神の根元の世界は更に5, で記した稽古が必要と云うこと
か アイウエオの母音のエネルギーが満ちている世界」

…その 167 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 167

人間精神の第 3 の霊位としての現象の根源である宇宙そのものが登場してきました。ここで言霊学のこ
とを簡単に説明しておきましょう。この根本宇宙の内部はどうなっているのでしょうか。このいわゆる精神の先
天構造についての説明はここ 2000 年の間存在しませんでした。精神現象というものはどのようにして発現
してくるのか、その現象は厳密に分類すると何種類あるのかは精神宇宙の先天構造によって決まります。
この精神的解明がないのですから人類のここ 2000 年の歴史は学説、論文が入り乱れ、片時も安定を
得ることはありませんでした。しかし精神の先天構造の解明が過去の人類の所有として存在しなかったの
ではありません。今をさかのぼる 5000 年ないし 8000 年以前にすでに解明され言霊フトマニの原理として日
本の大和言葉制定の原典となり、諸種文化発祥の規範となっていた時代が長く続き、そして訳あって今

から 3000 年前意図的に文明の表現表面から隠されてしまったのです。この隠された期間中精神の先天構造を示すものとしては宗教書における比喩的な象徴や易経の数値的表現などがあるにすぎませんでした。

この 2000 年にわたる精神原理の隠没の時代は全くの暗黒の時代であったということが出来ます。幸いなことに明治天皇に始まる諸先輩の努力により古事記、日本書紀の神代巻きを手がかりとして言霊の原理は 3000 年前にあったと同じ姿で復元されました。

先に述べました人間精神の霊位を表すのに言霊学は五つの母音を当てはめます。欲望が発生してくる第一段階から順次人間の自覚の向上にしたがって第二第三・・・と母音はウオアエイと並びます。禅で単に「空」と言って表現された宇宙は、実はウオアエイと五つの宇宙が次元的な界層を作っている宇宙でありました。第 3 の感情の宇宙であるアの次元に第 4 のエ、第 5 のイの宇宙が続きます。エとは「選ぶ」すなわち第 1 から 2・3 の三つの世界のうち、今は何を行為として採用するかを選ぶ人間の選択性能が発言してくる宇宙であり、最上段の第 5 番目のイの宇宙は既出の四つの性能を根本的に統括する人間生命意志の次元です。人間の活動をこの最上段の生命意志でとらえたのが言葉の言葉である言霊であります。

「11、(選ぶ・政治・道徳・実践智) 言霊エの心の世界、今は何を選ぶかという知エが湧き出てくる世界です。それには言霊アの心(感情・愛と慈悲)に立たなければ、実践智は湧いてきません。その湧き出てきた思いが選択(ウ・オ・ア)のどれで行くか選ばれた(実践智)方法です。それで対処することで間違いなく、成功できるようになっている。此が宇宙の経綸と言われるモノの意味かと思えます。此で思い出すのは北海道の鈴木知事の生き様です。夕張市の市長時代の成功の軌跡と現職知事の活躍ぶりにみることが出来ます。総て自分の欲ではなく、市民・道民のためにが、先行した思いで物事を決めて行っているからです。ま

さしく実践智エの仕事です。」

..その 168 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 168

霊能者がその性能を発揮するためには根本宇宙と接触することが必要条件であるのですが、その宇宙というものを言霊学によって五つの界層（ウオアエイ）の次元の重なりと詳しく知ることができます、と霊能者の霊位の判定に極めて便利となります。

先に説明しました霊能のウ・オの段階を通り越してアの霊位に達しますと、その霊能者は宗教的、芸術的なインスピレーションを駆使することができます。人の迷いを救ったりまたは芸術的な才能に恵まれることになります。

「12、この文に接したとき宮本武蔵の残した、墨絵の芸術性の高さが思われました、まさしく言霊アの世界に武蔵は居たのを確信しました。」

またこの第 3 番目の宇宙までの霊能は人間の吉凶禍福を左右しますが、道徳的善悪には直接関係しません。例えば霊能によって金儲けとか立身出世とかに役立つアドバイスはしますが、金儲けや立身出世がその人の人生全体にどのような意義を持つかなど問題は全く無視されています。

霊能が個人の吉凶禍福の域を超えて社会、国家、世界とか、または人間とはといった道徳・政治の分野に関係するためには、霊能者の霊位が第 4 番目の言霊エの次元に高められることが必要になります。

霊能者にしてこの次元に入る人は稀なことであります。この次元にある霊能者はその場限りの個人的吉凶判断は口にしません。人としては今かくかくすべきであるという至上命令としてのアドバイスをすることとなります。第4のIの次元から発する現象は道德・政治の諸相なのですから。

「13、まさしく今の北海道の鈴木知事そのものです。」

霊位の最上階である言霊の宇宙では個人的な問題は消えてしまい、全人类的な文明創造のための経緯のみが問題となります。生命意志であり言霊である次元から見る時、この次元が人間生命構造の根底でありますので、人類は全体として一個の人間であり、歴史とは人類としてただ一筋の生命の流れであることが理解し得る段階なのです。と同時にこの次元から見ると、人間の心の営みを全て見通し調和させることが可能であります。以上説明してきました人間の5段階の霊位を仏教では第一段階から順に衆生（ウ）声聞（オ）縁覚（ア）菩薩（エ）仏陀（イ）と呼びます。

以上霊能者の霊について言霊の立場から判断の基準を説明しました。言霊の観点から見ると、この霊能者はこの段階の予言や過去の再現はできるが、それ以上のものは不可能である・・・という区別が容易になるはずですが。次に霊能者は過去の再現とか将来の予言をする場合人間生命の構造のどの部分を霊視する事となるのでしょうか。過ぎ去ってしまってすでに存在しない物やまだ姿を現していないものをどのようにして再現して言い当てるのでしょうか。再び言霊学によって人間精神の先天構造をみることにします。これが霊能判定の第3の観点となります。

・・・その169に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 169

下の図は空である先天宇宙から現象である子音が現れるまでに先天宇宙の内部で何が起こるかを言霊で図示したものです。日本の古神道では天津磐境と呼びます。ウからイまで先天構造が5段階で活動しますので天の五葉坂であり、それが天津磐境となりました。何も現象がない宇宙（母音）から現象が起こり、次々に現象が変化してついに最後に結果（半母音）となって集結しますが、その現象を引き起こして結果を実現する主体は人間生命意思の根本リズムを表す八つの父韻キシチニヒミイリなのです。この八つの父韻がアオウエ4母音に働きかけて現象の最小単位32子音を生み出します。この八父韻は現象を生み出す人間意志に備わった根本のヒラメキといったものです。ドイツ哲学で言う火花がこれにあたります。空である宇宙はこの八つの父韻の定まった変化のリズムに誘われて現象を起こしながら最終結果をもたらします。この時「空」である五母音の宇宙のどれに父韻が働きかけるかによって、父韻のリズムすなわち八つの父韻の並び方が違ってきます。左にそれぞれの父韻の並び方を書きます。

ウの宇宙キシチニヒミイリ

オの宇宙キチミヒシニイリ

アの宇宙チキリヒシニイミ

エの宇宙チキミヒリニイシ

イの宇宙八父韻の順序不定

そして霊能者は人間の先天構造のこの八つの父韻のリズムを雰囲気として靈感することによって、霊能を発揮するのです。人間の今、ここの中今の一念には先の図に示された如く母音も父韻も備わっており、そのうちの父韻の配列の順序を察知することによって過去の再現も将来の予言も可能となるわけです。もちろん霊能者の大部分は言霊学を知らず、母音も特に父韻のことなど知ってはいません。しかし霊能者が靈感によって察知するのは先天構造の内部の父韻リズムなのです。それゆえ言霊学の父韻を自覚するならば、霊能者の過去・未来の霊視の真偽の判断は全く容易なことといえます。

「14, 人間の心の五段階の心を使う順序が出てきました。此こそ日本の言霊の奥義でしょう。この言霊を自由に使いこなすことが人間の最終目標になります。聖知り 言霊自覚者 天の日嗣ぐの命 神 宇宙の経綸者と呼ばれる所以です。かつての天皇はこう呼ばれていたのです。もちろん聖知りでありました。」

以上で霊能と言われるものの内容を人間精神構造の学問である言霊学の立場から解明しました。これによっていわゆる霊能が人間の精神のどこに関連して起こってくるかが大体お分かりいただけたことと思います。今まで霊能とは神秘的なものまたは人間の極めて特殊な才能のように思われてきました。しかし言霊学という人間精神の科学の鏡の前に霊能のメカニズムが解明されて見ますと、霊能というものがそれほど神秘的でも特殊なものでもなく、人間の持っている天与の性能の一部に過ぎないことが了解されてきます。

..その 170 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 170

そしてそれとはまったく逆の言い方をすれば今まで平々凡々何当たり前の言行と思われていた私たちの日常生活や職業上の営みが、実は精神の先天構造の働きによって生み出されてくる元の宇宙そのものの神秘霊妙な営みなのだということも了解できるであります。

人間精神構造を自覚すると否に関わらず人間が生きているということ、これに過ぎる霊能はありません。大工さんは家を建てる霊能者であり、科学者は新しい法則や技術を発見する霊能者であり、家庭の主婦は家事育児一般の霊能者ということが出来ます。人間は職業や家庭生活を通じて、その人の性能を高めていくことが、この世に生まれてきたことの天与の使命であると考えることによって、その人の一生は栄えあるものとなるでしょう。

「5、で記した内容ですもう一度載せます。自我意識の執着をすてる稽古、即ち合氣神道の稽古と同じ意味と思います。そして種々の洞察の修行、(物事を観察してその奥底にある本質を見抜く修行)をする事で、霊能は開けてくると言うことか つまり先入観を持たずに物事の本質を観る稽古、つまり言霊として捉え、その本質とはウ・オ・ア・エドの世界にその人の思いはあるかを観ることを積み重ねる修行ことか、そうするとその人の一生は栄えあるものとなる。」

今回は再び霊能の問題を取り上げて一般的には霊能現象とは思われていない社会の現象と霊能との関係を考えてみることにしました。それによって読者の皆さんが社会の中で営まれる普通の生活が、実は生命の霊妙な力動によって支えられているもの、であることを知っていただければ幸いです

世の中には、そんなものは絶対に信じないという人もいますが神かかりとか霊能・靈感とか言われる現

象は起こりうることであります。時には突然前後の知識・状況に関係なく思ってもいなかった知恵へのひらめきや、過去の記憶のよみがえりが起こってくる。筆者も今日までそういう 霊的現象を幾十度となく目の前に見たり聞いたりした体験を持っています。

ただここですべての霊能について言えることは、霊能力を持つ人々が霊能がどこから起ってくるか正確に分かっていないことです。もちろんこれら霊能に接する一般の人々もそれを知りません、からその現象は神秘性を増します。そこに神という概念が登場して一応の納得ということになる。神や仏が起こしたといえばお互いに対するとりあえずの答えになるからです。

なぜ神秘だと感じるのでしょうか。人々が従来使っている通常の知恵～商売上のテクニック（言霊ウ）、学問の理論的な思考（言霊オ）感情の動き（言霊ア）それにいろいろな道德観（言霊エ）など～ではどうしても説明することができないからです。

・・171 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 171

事実霊能などの神秘現象は、ふつう私たちの意識が認めている欲望・学問・感情・道德の世界とはかけ離れている領域から起ってくるものなのです。従来の世界の人々が認めている知識や知恵によりもう一段上に、更に高い人間のもっと確実な知恵によって成り立っている次元の段階が存在していて、何かの折にその領域の扉にすき間ができ、そのすき間を通して中の知恵が瞬間的にほとぼり出て、人間に知覚さ

れるのです。これが霊能を体験です。そしてこの通常の知恵の一段上の次元を言霊学では言霊イと呼びます。生命の創造を意志の次元です。

「15, 聖知り 経綸者 天の日嗣ぐの命 神 を指します言霊イの世界です。それへの途は霊能だけでなく、宗教的または芸術的体験によっても確かめられると云っている。」

この世にふだん通用している四つの知恵ウオアエ（この 四が世と呼ぶこげん語源です）よりさらに一段高い知恵が存在することは、いわゆる霊能だけでなく宗教的また芸術的体験によって確かめられています。宗教的体験によってこの一段高い次元に接した人は「神仏に通じた人」として民間宗教では教祖とあがめられ、従来の宗教では聖者とか上人とかとよばれました。この領域に接するのは宗教的体験だけではありません。絵・彫刻・音楽・詩・小説等の創作・労作の途に於いてより崇高な美と真実の世界に没入することがあります。

この世界に接し得た時の創作は一見して他のものと全く違っていることがわかります。例えば有島武郎の小説「カインの末裔」についてみましょう。作者は粗野な主人公の不運で粗暴な暮らしの一生を逐一追っています。楽しい明るい場面は全くありません。それどころか、粗暴なふるまいの描写は克明です。にもかかわらずこの小説全体は暖かい救われるに包まれているのです。崇高な世界に接しながら書かれた作品には真実を描写する精緻な冷酷な観察と、文章全体を包む何物をも許す暖かい光に満ちています。

小説をもう一つとりあげましょう。横山利一の「春は馬車に乗って」という短編があります。結核で転地

療養中の妻を東京に住む夫が見直場面がえがかれています。そこでは長い間離れて暮らしている未だ若い異性同士の一見穏やかでない大人の会話が交わされます。二人とも決して甘っちょろくありません。けれど小説の全文は題名の「春は・・・」のごとく底なしの明るさに包まれています。こういう文章は高次の世界に接している時しか描くことはできません。

仏教に「色即是空」という言葉があります。色というのは色のことではなく、この世の中に姿をもった存在という意味です。芸術が色である実相を描写するには透徹した観察眼が要求されます。と同時にその観察する眼自体は小さい自我の経験による目ではなく、自我を超えた崇高な美と真の次元の眼（空）である時、小説の傑作が生まれるのです。

俳聖の芭蕉は色の観察を突き詰めて「古池や かわず飛びこむ 水の音」と実相を完成し「あらたふと 青葉若葉の 日の光」と温かさの根元をえがいたのでした。高次の真実と美の世界に接続している小説は、右のほかに芥川竜之介や国木田独歩党の作品の中に見いだすことができます。しかし宗教的芸術的資料や労作の途で出会うこの工事の世界との接触は、時間的にはそう長い期間ではありません。多くの場合はわずか数分から長くて数日間ないしは数カ月くらいが限度です。その世界との交流の歓喜の体験はそれがまるで夢ではなかったかと思われるほど時間が来ると、すうっと消えてしまいます。残るのは元の木阿弥の凡庸な自分ひとりです。

そして崇高な美の世界との接触の歓喜があまりに素晴らしかったために、それを体験した宗教家・芸術家は、その世界にいつも住んでいたい希望に駆られます。宗教家は一生のあいだ自己の心の中に光を求め

て菩薩の行を続け芸術家は絶えざる渴望を満たそうとして足掻きます。有島武郎は悶絶書き苦しんだ末に自殺してしまいました。過去に見ることができたすばらしい世界が今度はいくら見ようとしても見ることもできない悲哀に自らの死を選んだのでした。芥川龍之介はつかもうと焦るむなしい努力に身も心もむしばまれてしまったのでしょう。一度は見ることができた崇高な超越世界の体験を再び見ようと努力してみることができず求めても、求めても超越世界に住むことができぬ自分を発見するときの幻滅ほど悲しいものはありません。芭蕉は俳諧の究極の境地に安住することを求めて旅に出ました。「旅に病んで夢は枯野を駆け廻る」彼の辞世の句でありました。詩人ゲーテは死に臨んで「もっと光を」の言葉を残したのでした。

「16、アの世界を体験しても直ぐに消えてしまうとは、今まではアの世界を抽象的な概念でのみ表現していた。表現する方法が分からなかったためである。ところが言霊布斗麻邇が日本語の理論として甦って来た現在は、アの世界はどういう世界であるかを理解している。その次のエの世界イの世界を言霊の布斗麻邇は余すところなく本質を伝えてくれる。だからそこに到達出来る事がより確実に早くなると言うこと。」

その 172 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 172

既成の宗教はこのような悲哀に負けず、崇高な仏の世界に安住するための修行法をいろいろ工夫をしています。禅曹洞宗の開祖道元は超越世界に説明する方法を日常の行住座臥の座禅に求めました。浄土真宗の親鸞は光明世界に住むことのできぬ自我の悪業をそのまま肯定し、「とても地獄は一定住家ぞかし」といって自我の地獄をそのまま安住の境と諦観し、念仏だけが真実なのだと言い切ったのでした。

悲哀と幻滅を乗り越えていくいわゆる菩薩行を阿弥陀経には阿弥陀仏の修行中の名前であった法蔵菩薩の誓願として告げるように説かれています。

「我超世の願を建つ。心無常道に至るとも、この願満足せずば、誓って正覚を成らじ。」超世の願とは超越世界に常住する願いのことです。

大乘の中の大乗経典といわれる法華経にもこの最高の次元の世界を極めることの困難を説いた次の経句があります「諸仏の知恵は、甚だ深く微妙であって その知恵の門は難解で入ることが難しい一切の声聞や辟支仏の 知る能わざる所なり」経文中にある声聞とは仏教の経文を聞いてその理論を学ぶ人のことであり、辟支仏とは一度は仏教でいう空の悟りを得、超越世界に接することができた人のことであります。その人でも超越世界である仏の知恵の中に常住することは難しいと説かれているのです。さらにこの難解難入を嘆いた中国の聖僧寒山の詩に次のようなものがあります。

我聞く天台山 山中に琪樹有り 永言して之を擧ぢんと欲すれども石橋の道を暁るなし此によって悲嘆を生じ 幸居してまさに暮れんとす 今日鏡中を觀れば 颯爽として鬢髪垂れて素の如し

琪樹とは精神的な宝の実が熟する樹のことで、仏教いう最高の仏の世界をたたえたものです。仏が手にする麻邇宝珠のことであります。石橋とはこの世から超越世界にわたる橋です。中国第一の聖僧といわれる寒山にしてそこへわたる方法が分からないことを嘆いたのでした。

世の中には数多くの霊能者が居り、極めて短時間とはいえ超越世界の知恵を感受しているいろいろな霊能力を発揮しています。過去 3000 年の間多くの聖者・菩薩が神秘体験を得て高次の崇高な領域に

常住することを願って苦心の修行を続けてきました。各宗教にはその超越世界を目指す修行の方法や心構えが事細かく説明されています。にもかかわらずその高次の世界に没入することは困難であり、常住する人が出ないのはどうしてなのでしょう。

理由は一つです。その人間生命のもっとも高次の、従来の四つの人知であるウオアエの次元を超越した知恵の世界の内容を直接に表現する言葉がなかったからです。その世界をたとえて言う言葉は沢山あります。キリスト教では、天国、エデンの園、神の国、降臨する生命の城など、仏教では極楽、仏国土、または「菩薩を教える方、仏が守護り念ずるところ」と説かれています。しかしそれらの表現は高次の世界をはるかに望む地点からの名前であって、その世界そのものの内容を示したものではありません。菩薩の行を極め、仏の境地に限りなく近づいた聖僧寒山は、その境地を表現する言葉の持ち合わせがなかったのです。修業といい、研究といい一切の文化活動は到達した境地や発見された事実に適切な名前を付けることによって活動は完結します。名前が付かなかつたら、その修行や研究は初めからなかったのと変わりありません。修行により超越世界に限りなく近づくことができた寒山であったからこそ、その世界を表現する言葉を持たないことを、琪樹によじ登って、その宝をとることが出来ないことを嘆くことができたということも出来ます。

「再度載せます 16、アの世界を体験しても直ぐに消えてしまうとは、今まではアの世界を抽象的な概念でのみ表現していた。表現する方法が分からなかったためである。ところが言霊布斗麻邇が日本語の理論として甦って来た現在は、アの世界はどのような世界であるかを理解している。その次のエの世界イの世界を言霊の布斗麻邇は余すところなく本質を伝えてくれる。だからそこに到達出来る事がより確実に早くなると言うこと。」

..その 175 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 175

仏教信仰は教行信証を大切にします。教とはかくすれば悟りをうるぞという教えです。行とはその教えに従って修行することです。その修行も漫然と行うのではなく、そこにこの道を行けば必ず悟りに入るという堅い信念が必要だと説かれています。そして最後に証し、が強調されます。証とは修行して悟り得た境地を言葉や文字や絵として表現することです。表現することが出来て初めて修行は完成したことになります。

それなら幾多の霊能現象を可能にし、聖者・聖僧がそこに常住することを渴望してきた超越世界の内容を的確に表現することができる言葉は存在しないのでしょうか。いいえ存在します。各宗教にたとえ話として書かれている以上、昔は確かに存在しました。そして世界の文明を経営する上での理由により、世界的には 3000 年、日本に於いては 2000 年の間、人々の表面意識から隠されてしまったのです。そして真実の言葉とその意味が存在しなくなった世界の一時しのぎの精神的支柱として、方便上創設されたのが現在世界にある各宗教であります。既成の宗教が人間の最高次元の存在をすることを説きながら、その次元に踏み込んで内容を明らかにすることがないのは以上の理由によるものです。

今の真実の言葉とその法則が 2000 年の忘却の中から日本人の脳裏によみがえってきました。その言

葉をアイウエオ五十音言霊布斗麻邇と云います。人間の超越した第五の精神次元の世界の内容を明らかに表現することができる世界で唯一の言葉です。

子供のころから見慣れているアイウエオ五十音にそんな意味があることなど当の日本人でさえ思ってもいないことであらう。五十音表がつくられたのはそれほど古い時代ではないと主張する国語研究者も多いのですから。しかし今度復活したアイウエオ五十音言霊の原理の上に立って調べてみると、古代日本語はこの原理にもとづいてつくられたということがわかってきます。ですから少なくとも、数千年以前に存在した原理なのです。この原理によれば人間の心は五つの次元の階層からなりたっています。それぞれの次元に自覚成長の順序に従ってウオアエイと名付けます。

原理についての詳しい説明は当会発行の「言霊」を読んでいただくとしてここでは簡単に説明しましょう。

その五つの次元の最高段階である創造意思言霊位イの視点から心の全体を分析しますと、人間の心はちょうど五十の要素によって構成されていることがわかります。この要素を言霊と呼びます。この五十音の言霊は人間の心を分析し煮つめていってもこれ以上分析できない最終の要素の全部でありますから、人間の心の現象でこの言霊によって表現し説明することのできないものは存在しません。世の中の人々が不思議だと畏怖する霊能現象もしかりです。

..その 176 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 176

五十音の言霊を分類しますと、ウオアエイの五母音、ワヰウヱヲの半母音、キシチニヒミイリの八つの父韻と三十二の子音に分かれます。母音とは人間が目を閉じて無我でいる時の姿といったらよいでしょうか。何も考えていないけれど、そこから心の現象があらわれてくる大元の心の世界です。半母音はその純粹の我に対する汝の世界です。この我と汝が無我で無言であるならば現象は起こりません。われと汝の間で心の交流が始まると何らかのことが表れてきます。表れてきた現象が子音です。そして汝と我の間を飛び交う心のひらめきといったものが父韻です。ドイツのこと古典哲学では火花と呼びました。二人の学者が論争するとき、両者の間に火花が散るといわれています。しかし火花が散るのは論争の時だけではありません。人間の行為のすべてにこの火花が散ります。われと汝の間を飛び交って母音を刺激し現象を起こす創造の火花が父韻です。

人間の根本意志が起こす創造のバイブレーションといったら分かり易いかもしれません。人間が行動を起こそうとするとき、言い換えると頭脳内で言葉をまとめようとするとき、八つの父韻の火花が次から次へとひらめき駆け巡って、それがウ（欲望）オ（理論）ア（感情）エ（道徳）の母音宇宙に刺激を与えて現象を生じていきます。この場合八つの父韻が母音に結び付く配列は母音ウに結ぶ配列、オに結び付く配列、・・・と母音の次元に従ってそれぞれ特定の並びがあります。配列を間違えれば現れる現象は支離滅裂となります。

このことを頭に入れながら 霊能のメカニズムを考えてみましょう。一番ポピュラーなものを例に引きます。

何か迷っている人 A が霊能者 B のところに行きます。A は迷っているのですから頭の中の創造の父韻の火花をどの順序でひらめかしたらよいかで迷っているのです。B は霊能状態になるや自我意識がほとんどなくなります。無我となります。ということは先に書きましたように現象が起こる以前の大元の世界であるウオアイ五母音そのままの状態です。そこに A の順序の定まらない八つの父韻が感情移入的に結び付くのです。

B は無我です先入観がありません。人間は迷った末に先入観を捨てれば自然に立ってくるものです。すなわち母音の次元に特定の父韻の配列の整備が霊能者 B の中で行われます。B の口から順序の整った言葉となって A の行動の指針が飛び出してくることとなります。これがもっとも一般的な霊能のメカニズムであります。五の母音の宇宙というのは、先の「霊能について」の会報 1 で詳しく説明したように、自他の区別のない、時間空間を超越したものでありますから、この感情移入が可能なのであります。以上例に引いた霊能現象のほかにもいろいろな種類の霊能がありますが、人間の創造意思の現れである八父韻との結合という立場から考えるならば、一切の霊能のメカニズムは手に取ってみるがごとく明瞭に理解することができるものであります。

・・177 に続く

霊能について言霊学より考察 島田正路氏著書コトタマ学上巻より

今の心境も合わせて記します。2020/10/12

その 177

以上言霊学の立場から霊能力のメカニズムを調べて来ました。今日まで不思議なことと思われてきた霊能現象が言霊の立場から見るときいとも当然のこととして受け取ることができます。神秘のベールは取り払われたのです。神秘でなくなったということはその存在の意義が失われたことを意味しません。霊能現象はこれからも変わらず起こることでしょう。ただその現象によってしめされる事項が真実であるか否かの審判が、霊能現象が起こったすぐその場で可能となりました。その審判の基準となるのが言霊の原理であります。古代言霊原理による霊能・信託の審判をサニワと呼びました。琴弾ともいいます 霊能といい、神仏という従来ただ畏怖されただけであった存在が人間の心の奥底にある合理性の鏡によって明るみの中に照らされることとなりました。

これは画期的なことでもあります。このことへの理解が進むならば人類社会は精神的に一段の進化を示すことは間違いありません。霊能は不可思議なものではなくなりました。同時に霊能の不可思議のベールを剥がした五次元の言霊の原理から私たちの日常生活を見るとき、毎日毎日繰り返される出来事、朝起き飯をたべ夜寝るという当たり前の行動の一つ一つが、実は人間の心の最も奥深い宇宙にある父韻と母音の呼び合いによって生み出されるいとも霊妙な現象なのだということを知ることができます。

夏空の入道雲から突然鳴り響く音を雷といいます。雷はひびきわたって大地をふるわせませす。言霊のことを大昔五十^{いかづち}神土と呼びました。五十音言霊をそれぞれ粘土板に書いて素焼きにしたことからその呼び名ができました。人間が発する言葉の一つ一つは五十言霊が鳴り響くことによって生まれます。人間の言葉は雷なのです。ですから人を動かし、時には世界を動かす力があります。日本語の原理が全世

界を動かし、恒久平和の新世紀をもたらすのもそう遠いことではありません。

..その 178 に続く